

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 22 日現在

機関番号：32518

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720005

研究課題名(和文)「都市の環境倫理」の構築に向けた基礎研究

研究課題名(英文) A Basic Research for construction of "Urban Environmental Ethics"

研究代表者

吉永 明弘 (Yoshinaga, Akihiro)

江戸川大学・社会学部・講師

研究者番号：30466726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)： 著書『都市の環境倫理ー持続可能性、都市における自然、アメニティ』を刊行した。この本は「都市の環境倫理」をテーマに書かれた本としては、日本初である。またこの本は環境倫理学のテキストとしても活用できる。

また、研究報告書として、『都市の環境倫理 資料集』を編集し、国内の研究者4人へのインタビューと、2回の講演会の記録を掲載した。

研究成果の概要(英文)： I published a book "Urban Environmental Ethics: Sustainability, Nature and Amenity". In Japan, such a monograph was not until publishing this book. It can be used for a textbook on environmental ethics.

I edited "Urban Environmental Ethics: Reference Collection". This book contains interviews with four professors and two lectures reports.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：環境倫理 都市 持続可能性 自然 アメニティ

## 1. 研究開始当初の背景

1970年代のアメリカで誕生した環境倫理学は、しばらくの間、「自然の価値論」に焦点が当てられていた。そこでは環境といっても「自然環境」が念頭におかれていた。特に、人の手が加わっていない「原生自然」の保護が強調されてきた。

1990年代に入り、加藤尚武によって、日本に環境倫理学を導入されたが、その際に加藤は、守るべき環境として「地球環境」「資源環境」を前面に出して、アメリカの議論から大きく踏み出した。他方で、鬼頭秀一は、地域環境と、人の手が入った自然（里山など）の重要性を提示することで、アメリカの環境倫理学を批判した。

これらの議論はいずれも有意義なものだが、現在の多くの人は都市に住んでおり、都市環境が身近な環境となっていることから、環境倫理を人々が自分自身の倫理問題として実感できるようにするためには、都市環境を含めた環境倫理学を構築することが必要になると考えた。

実際に、近年のアメリカでは「都市の環境倫理」に関する議論が登場している。それに対して、日本では都市を含めた環境倫理学の議論がほとんど行われていない状況にある。このような背景のもとで、研究代表者は、近年のアメリカの議論をふまえながら、都市の環境倫理を具体的に構築することをテーマに研究をスタートさせた。

## 2. 研究の目的

本研究では、望ましい都市環境を考える際に必要となる規範的な論点を、「都市の環境倫理」として提示することを目的として設定した。

また本研究は、環境倫理学の従来の「環境」観を変え、環境倫理学を自然と人工物を含む総合的な環境を扱う分野にすることも目指した。それによって、これまで一定の自然観、環境観に無反省に立脚し、それを普遍的に適用しようとする議論から逃れられるだろうと考えた。

さらに、現在、実際に多くの人が住んでいる都市環境に対する人々の多様な認識を精査することによって、持続可能性、都市における自然、アメニティに関する、より実感に即した実践的な規範的論点を提示することを目指した。ここで提示された論点を通して、環境経済学、環境社会学、生態学、都市工学、地理学の議論を批判的に吟味することも可能になるだろう。

以上のような広がりを含めて、「都市の環境倫理」を日本で初めて本格的に問題提起すべく、『都市の環境倫理』という名を冠した単著を刊行することを、本研究では最終目的とした。

## 3. 研究の方法

「都市の環境倫理」を具体的に提示するために、持続可能性、都市における自然、アメニティという三つの観点から考察することを試みた。具体的には、資源エネルギー論、都市論、流域論、アメニティ論などの知見を取り入れるべく、専門家へのインタビューを行った。また、北九州市、真鶴町、鞆の浦といった、まちづくりや地域紛争の現場を見学した。

## 4. 研究成果

(1) 当初の目的通り、研究代表者の初の単著となる『都市の環境倫理 持続可能性、都市における自然、アメニティ』を刊行した。

「第一部 環境倫理学をふりかえる」では、これまでの日米の環境倫理学の議論を教科書的にまとめた上で、地理学などの議論を援用しながら人間と「環境」との関わりについて考察した（この部分のもとになったのは千葉大学に提出した博士論文である）。

第1章ではアメリカの環境倫理学の歴史を「自然の価値論」から「環境プラグマティズム」へという流れとして描いた。第2章では、日本の環境倫理学の議論の代表として、加藤尚武と鬼頭秀一の議論を取りあげて論評した。ここでは、環境プラグマティズムの視点から、日本の議論が先進的であったことを示した。第3章では、あらためて「環境」の定義を行い、そこで見出された「環境」を研究するための適切なアプローチとして、人間主義地理学と風土論の議論を導入して、ローカルな環境倫理の一例を提出した。

「第二部 都市の環境倫理」では、都市に焦点を当て、望ましい都市環境を考える際に必要となる規範的な論点を提示することを試みた。

第4章では、アメリカの環境倫理学者アンドリュー・ライトによる「都市の環境倫理」を紹介するとともに、具体的な問題領域として、(1) 都市の持続可能性、(2) 都市における自然、(3) 都市のアメニティを提示した。その上で、ベルク、ジェイコブズ、宇沢弘文、間宮陽介の都市論を通じて、都市の環境倫理の担い手について考察した。

第5章では、三つの問題領域について、環境政策論、保全生態学、都市論からの知見を援用して議論した。とくに、都市のエネルギー問題（原発問題を含む）、都市の自然体験（秘密基地体験）、都市の建築物の高層化（建築の自由と規制）に焦点を当てた。

第6章では、真鶴町の「美の条例」を紹介し、環境に関する規制がうまくはたらくために必要なことについて考えた。次に、まちづくりに関する市民参加のツールとして「アメ

ニティマップづくり」というしくみを紹介した。最後に、本書で扱ってきた「ローカル」な問題が、「グローバル」な問題にどのようにしてつながるのか、について議論した。また環境に対する私的な意見と公共的な意見との関係についても論じた。

以上をふまえて、終章では、都市の環境整備を行う際のチェックリストを示すことで、本書なりの「都市の環境倫理」をまとめた。

(2) 研究期間中に行った哲学・倫理学以外の専門家へのインタビューと、研究会の記録、および市民団体とともに行った読書会の読後感想文などをまとめた『都市の環境倫理資料集』を刊行した。

第一部には、4人の専門家にインタビューを行い、それを文字におこしたものを掲載した。

生物学者の岸由二先生は、「流域」をベースに考えることによって、都市における自然の再生と、都市の基盤となっている大地のデコボコに住み直すための環境教育を実践している。岸先生には、その際の都市のイメージや、現象学的な環境倫理の構想についてお話をうかがった。

経済学者の間宮陽介先生は、ケインズとハイエクの思想の研究者として著名だが、近年では活発に都市論を展開されている。間宮先生には、都市論と経済思想とのつながりについてお聞きしたところ、経済思想のみならず、広く文化的な視点から、現在の都市問題・地域問題について話された。

同じく経済学者の和田喜彦先生は、エコロジカル・フットプリントの考え方を日本に導入した方である。和田先生には、“都市は地球環境にとって良くない地域である”という言説を支えるものとしてエコロジカル・フットプリントが使われていることについてお聞きしたところ、環境に悪いのはライフスタイルや都市構造の問題であり、都市そのものが悪いわけではないと答えられた。

経済学者の宮本憲一先生は、公害研究とアメニティ研究の先駆者であり第一人者である。今回は都市のアメニティ概念について基本的な部分からあらためて伺った。その中で先生は、アメニティというとぜいたく品のようなイメージもあるが、アメニティは生活の基盤となるものであり、人権として規定しなければならないものだと言われた。

第二部には、都市問題の事例研究として、地理学者の鈴木晃志郎氏の、鞆の浦の架橋問題に関する論考を掲載した。また吉永による、近年「サステナビリティ」に代わるキーワードとして浮上している「レジリエンス」概念に関する著作の書評(要約紹介が中心)を掲載した。

第三部には、講演の記録を掲載した。石渡

正佳氏の講演は、産業廃棄物の不法投棄問題がテーマであったが、不法投棄のお話だけでなく、東日本大震災のがれき処理についてのお話や、環境学の用語解説などを含む充実した内容であった。

新雅史氏の講演は、商店街の衰退についての社会的分析であった。討論の中で、新氏は、商店街活性化もまちづくりもスーパースターを待望するのではなく構造問題を考えなければならないと指摘された。

第四部には、東京都中野区で2年間にわたり実施した、ジェイコブズ『アメリカ大都市の死と生』読書会の、読後レポートを掲載した。大学の中だけでなく、市民とともに都市について考え、学び、議論したことの成果である。

最後に「都市の環境倫理」を考えるために参考となる文献を紹介した。

この資料集を、環境論、都市論、倫理学、政治学の研究者に広く配布したところ、たいへん好評であった。

(3) 千葉大学の水島治郎教授との共編で、『千葉市のまちづくりを語ろう』というブックレットを刊行した。ここでは千葉市という具体的な都市における市民活動の事例をまとめた。まちを良くしていくヒントが散りばめられているので、まちづくり活動を行っている人や団体には参考になると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

吉永明弘「地理学と環境倫理学の協働に関する覚書」『江戸川大学紀要』23号、303-310頁、2013年3月

吉永明弘「CEPAツールキットの思想に基づく環境学の授業の構成とその実践」『江戸川大学紀要』24号、361-367頁、2014年3月

[学会発表](計2件)

吉永明弘「なぜ倫理学と地理学との協働が必要なのか、そしてそれはどのようになされるか」第63回日本倫理学会ワークショップ「デジタルマッピングの倫理」報告、2012年10月12日、日本女子大学

吉永明弘「現象学的地理学は環境論にいかに関与しうるか」第34回日本現象学会ワークショップ「現象学の環境問題に対する貢献可能性とその限界」報告、2012年11月18日、東北大学

[図書](計3件)

水島治郎・吉永明弘編『千葉市のまちづくりを語ろう』(千葉日報社) 2012年3月

吉永明弘『都市の環境倫理 持続可能性、  
都市における自然、アメニティ』勁草書房、  
2014年1月

吉永明弘編『都市の環境倫理 資料集』  
江戸川大学社会学部現代社会学科、2014年3  
月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉永明弘（江戸川大学・社会学部・講師）  
研究者番号：30466726

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし